

# 南宋袁甫の「朱陸張呂折衷」論：「鄞県学乾淳四先生祠記」精読 Zhu-Lu-Zhang-Lü Eclectic Philosophy in Yuan Fu's Thought: The Reading of *Yin Xianxue Qian-Chun Sixiansheng Ciji*

中嶋 諒  
NAKAJIMA, Ryo

## 日本語要旨

本稿は、南宋後期に活躍した袁甫に着目し、その「朱陸張呂折衷」論について考察したものである。具体的には、まずは袁甫の文集『蒙斎集』の中から、朱熹、陸九淵、張栻、呂祖謙の四先生について言及した「鄞県学乾淳四先生祠記」を精読した。そしてこの作業を通じて、袁甫が陸九淵の文集（具体的には、周敦頤『太極図説』をめぐる、いわゆる「無極太極」論争において、陸九淵が朱熹に宛てた書簡の中に見える「一是之地」ということば）をもとに、自身の「朱陸張呂折衷」論を展開していったことを指摘した。

## 1. はじめに

中国南宋前期に生きた朱熹（朱子、1130～1200）は、その論敵として知られる陸九淵（象山、1139～1192）と直接に、あるいは長大な書簡をもって激しい論争を繰り広げた。けれども南宋後期、彼らの再伝の弟子たちが活躍した時代においては、かえって朱陸双方の思想を接近させていこうとする、いわゆる「朱陸折衷」と称される思想潮流が現れた。清代の陸学顕彰者として知られる李紱（穆堂、1675～1750）は、

陸九淵再伝の士に、有名なものは非常に多いが、陸学を明らかにしたのは、包恢（文肅）と袁甫（正肅）の兩人である。〔陸子再伝之士、名人甚衆、而發明陸学、若包文肅、袁正肅二公。〕<sup>(1)</sup>『陸子学譜』卷16、「門人」上／373頁

と、陸九淵再伝の弟子の代表格として、包恢（文肅、1182～1268）と袁甫（正肅、1179～1257）を挙げるが、彼らはまた、いわゆる「朱陸折衷」論者でもあった。筆者はすでに、本誌第4、5号において、包恢の陸九淵評価にかんする資料を分析したことがあるので、本号では、さらに袁甫の著述に着目してみたい。<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>

さて袁甫は、甬上四先生と称される陸九淵の高弟の一人、袁燮（絜斎、1144～1224）の三男であり、歴史上、嘉定7年（1214）の科挙試験を状元で突破したことで有名である。また思想分野においては、「朱陸折衷」のみならず、朱熹、陸九淵、張栻（南軒、1133～1180）、呂祖謙（東萊、1137～1181）を挙げて、これら四先生の道が一つであると、「朱陸張呂折衷」とでもいうべき学説を残したことでも知られている。本稿では、この学説の根拠となった「鄞県学乾淳四先生祠記」（『蒙斎集』卷14、所収）について考察していきたい。

〔注〕

- (1) 楊朝亮点校、商務印書館、2016年12月。
- (2) 拙稿「南宋包恢の陸九淵評価 「象山先生年譜序」(他二篇)精読」(『実践女子大学 CLEIP ジャーナル』4、2018年3月)、「南宋包恢の陸九淵評価 「旌表陸氏門記」精読」(『実践女子大学 CLEIP ジャーナル』5、2019年3月)。
- (3) そのほか包恢については、拙稿「南宋包恢の「朱陸折衷」論」(『新しい漢字漢文教育』65、2017年11月)、「南宋包恢の陸九淵評価 「三陸先生祠堂記」精読」上(『実践女子大学人間社会学部紀要』14、2018年3月)、同下(『実践女子大学人間社会学部紀要』15、2019年3月)などがある。袁甫については、拙稿「南宋袁甫の「朱陸折衷」論」(『日本儒教学会報』3、2019年1月)を参照。さらに当時の「朱陸折衷」論者の動向については、拙稿「南宋銭時思想再考 「礼」と「自得」をめぐる」(『朱子学とその展開 土田健次郎教授退職記念論集』、汲古書院、2020年2月)や、「南宋後期の陸学について 包恢、袁甫、銭時を中心に」(『学習院大学文学部研究年報』66、2020年3月)なども見られたい。

## 2. 「鄞県学乾淳四先生祠記」精読

【凡例】

- ・底本には、文淵閣四庫全書本(台湾商務印書館景印、第1175冊、1986年3月)を用い、以下の諸本との校異を示した。ただし煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。
  - ・『蒙斎集』叢書集成初編(拋聚珍版叢書本)所収
  - ・『宋元学案補遺』(中華書局、2012年1月)巻75所収の「鄞県学乾淳四先生祠記」なお校異においては、それぞれ「集成本」、「学案補遺」の略称を使用した。
- ・解釈には、『全宋文』巻7440(上海辞書出版社・安徽教育出版社、2006年8月／第324冊・69～70頁)所収の王曉波氏による評点などを参照した。
- ・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。なお注釈の引用文中や通釈で( )を附したのは、訳者の補注である。また[ ]は、原文に附された小字注、または割注にあたる。なお原文・校異は基本的に本字を用いたが、注釈・通釈では新字を使用した。
- ・注釈で引用した原文には〔 〕を附して訓読を示した。ただし一読して明らかな場合には省略した箇所もある。

鄞縣學乾淳<sup>a</sup>四先生祠記

(1) 鄞縣立學舊矣、中廢不振。嘉定間、主簿呂君<sup>(2)</sup>康年聿新規制、垂成而去。嘉熙改元、  
(3) 趙君希聖來居是官、首白<sup>b</sup>宰、上之府、請益廣教養、益宏斯道。且謂近代師表如南軒張  
宣公、晦庵朱文公、東萊呂成公、象山陸文安公四先生、未祀于學、寧非大闕。遂併力  
舉茲事、屬某爲之記、固辭弗獲、乃言曰、夫道一而已矣。學者各植門庭、將以自尊其師、  
師道不如是也。三代既遠、漢儒<sup>(4)</sup>專門名家、破碎大道。自時厥後、紛紛籍籍、不能會于  
一。我皇朝大儒繼作、始克合百川而宗于海。中興以來、四先生身任道統之責、悉力主  
盟。凡修<sup>(7)</sup>之身、行之家、用之國、推以淑諸後進、皆天理人彝。如桑麻穀粟、鑿鑿<sup>(8)</sup>真實、  
不可誣已。

〔校異〕

a 淳…集成本、「淳」に作る（同治帝の諱、載淳を避けるため）。

b 白…集成本、「曰」に作る。

〔注釈〕

- (1) 鄞縣立學舊矣、中廢不振…浙江鄞県の県学の起源は、北宋慶暦年間にまで遡る。慶暦4年（1044）、いわゆる慶暦新政の一環として、詔が下され、各地に州県学の設置が認められた。ただし州学の学生が200人に満たない場合には、独自に県学を置くことはできず、孔子廟を学舎として代用するなどの必要があった。明州学もこれに該当したために、州下の鄞県学もまた孔子廟をもって代用していた。その後、慶暦7年（1047）、王安石（荆公、1021～1086）が知鄞県の任に就くと、積極的に明州の在野士人を登用して、その隆興の一助となった。それから大観3年（1109）、県学は西南に移されたが、建炎4年（1130）、戦禍に遭って消失してしまった。以上については、近藤一成氏『宋代中国科举社会の研究』（汲古書院、2009年2月／196～199頁）に詳細である。
- (2) 呂君康年…呂康年、江西婺源の人。呂祖謙（東萊、1137～1181）の猶子で、嘉定7年（1214）の進士（袁甫と同年）。『宋元学案』巻51に伝が立てられるほか、『宋人伝記資料索引』（2・1217頁）、『宋登科記考』（下・1315頁）などを参照。嘉定13年（1220）、呂康年は鄞県の主簿となり、ときの宰相である史弥遠（1164～1233、浙江鄞県の人）に鄞県学の再建を申し出たという。以上、陳莉萍・陳小亮氏『宋元時期四明袁氏宗族研究』（浙江大学出版社、2012年7月／31～32頁）を参照。
- (3) 趙君希聖…趙希聖、浙江黄巖の人。嘉熙2年（1238）の進士。李之亮氏『宋兩浙路郡守年表』（巴蜀書社、2001年3月／560頁）に拠れば、翌嘉熙3年から淳祐元年（1241）まで、知嘉興府の任にあったというが、それが事実であれば、本文に「居是官（是の官に居る）」とあるのと齟齬を来すか。そのほか『宋人伝記資料索引補編』（3・1604頁）、『宋登科記考』（下・1536頁）などを参照。

- (4) 漢儒専門名家…建元5年(前136)、前漢の武帝が董仲舒の建策により、五経博士を設けたことを指すか。五経博士は五経のみを、しかもそれぞれ一経を専門に教授したという。例えば『漢書』卷88・儒林伝に、「(嚴) 彭祖、(顔) 安樂各顛門教授。由是公羊春秋有顔嚴之学〔彭祖、安樂 各おの顛門教授す。是れ由り公羊春秋に顔、嚴の学有り〕」とあり、その顔師古注に「顛与專同。専門言各自名家〔顛は專と同じ。専門とは各自名家たるを言ふ〕」とある(中華書局評点本/11・3616頁)。
- (5) 合百川而宗于海…『尚書』禹貢の「江漢朝宗于海〔江、漢 海に朝宗す〕」に対する孔安国の伝(いわゆる偽孔伝)に「二水經此州而入海、有似於朝、百川以海為宗〔二水 此の州を経て海に入るは、朝するに似たる有り、百川 海を以て宗と為す〕」(『十三経注疏整理本』、北京大学出版社、2001年12月/2・176頁)とある。また楊雄『法言』学行に「百川学海、而至于海、丘陵学山、不至于山〔百川 海に学びて、海に至るも、丘陵 山に学びて、山に至らず〕」(『法言義疏』、中華書局、1987年3月/上・31頁)とある。あるいはこれらを踏まえるか。
- (6) 悉力主盟…「盟」は、会盟。ここでは諸侯が会合して盟約を結ぶことと解釈した。例えば朱熹が壮年、いわゆる未発已発説をめぐって、張栻と議論を繰り返したことや、呂祖謙の仲介で、陸九淵兄弟と江西鉛山の鵝湖寺で会面したことなどになぞらえているか。
- (7) 修之身、行之家、用之國…『大学』のいわゆる八条目のうち、「修身」(わが身を修めること)、「齐家」(家を斉えること)、「治国」(国を治めること)を想定するか。それぞれ後文の「切己之実学」、「忠君孝親之实心」、「経国濟世之实用」にも対応していると思われる。
- (8) 桑麻穀粟…「桑麻」は、桑と麻。養蚕と機織りに用いるもの。「穀粟」は穀物、雑穀の総称。『朱子語類』卷134・35条に「温公(=司馬光)之言、如桑麻穀粟〔温公の言、桑麻穀粟の如し〕」(中華書局、1994年3月/8・3207頁)とあり、龍文玲氏[等]編著『朱子語類選注』(広西師範大学出版社、1998年11月/下・899頁)は、この語を「瑣碎囉嗦」(細々していて煩わしいこと)と解釈している。本稿もひとまずこれに従った。

〔通釈〕

#### 鄞県学乾淳四先生祠記

鄞県は古くより県学が設けられていたが、その後は廢れて振るわなかった。嘉定年間(13年/1220)になると、主簿の呂康年が、ようやく旧制を新たにしたが、あと僅かというところで離任してしまった。改元を経て嘉熙年間(1237～1240)になると、趙希聖がやってきてその官に就き、はじめて県令に申し出た。そこで県上の府は、ますます教養を広め、ますます斯道を広めるよう求めた。また(趙希聖は)「近ごろ模範

として仰がれる師は、張栻（南軒、宣公）、朱熹（晦庵、文公）、呂祖謙（東萊、成公）、陸九淵（象山、文安公）の四先生であるが、彼らがまだ県学に祀られていないのは、大きな欠陥ではないであろうか」といった。かくして力を尽くしてこれ（四先生の合祀）を行い、私にその（祠堂の）記を著すよう依頼してきた。私は固辞したが許されず、そこで私は次のように述べることにした。

「いったい道はただ一つである。学ぶ者たちは、各々が一家をたてて、自らの師を尊ぶが、師道とはこのようなものではない。三代はすでに遠く、漢儒の専門名家たちが、大道を破壊した。このとき以降、（大道は）紛々として乱れ、一つに集まることはできなくなった。わが皇朝には、大儒が相継いで現れ、はじめて百川（のように分かれた道）が合わさって、（一つの大道として）海へと至ることができた。そして中興以来、四先生が自ら道（を）統（一する）という責務を負って、力を尽くして盟約（するかのごとく交流）した。およそ身を修めること、家を行う（斉える）こと、国を用いる（治める）ことは、いずれも推して後進の恵みとするという点においては、みな天理人倫である。（その一つ一つは）桑や麻、雑穀のごとく（細々していて煩わしいの）だが、これらはまさしく真実であり、欺きようのないものである。

四先生無二道、而學者師承多異、于是藩牆立、畛域分。所謂切己之實學、忠君孝親之實心、經國濟世之實用、睽離乖隔、不能會歸有極、反甚于漢儒、可悲也夫。殊不思乾淳以來、四先生相爲後先、所以明義利、別正邪、羽翼吾道、果爲何事。弟子之尊其師、當先識其師之道。大本必正、大旨必明、則道在是矣、奚必于一話言之間、一去取之際、屑屑焉較短量長、以是爲能事哉。迹類而心殊、名同而實異、乃後學之大病、又豈可以累四先生耶。若夫四先生之自相切磋、則固有不苟同者矣。正以道無終窮、學無止法、更相問辨、以求歸于一是之地。是乃從善服義之公心、尤非後學之所可輕議也。今趙君合祠四先生于學、超然出于各立門庭之表、其于大道之統、必有得焉者矣。上天之載、無聲無臭、愚又奚言。惟願同志者、勿自欺其心、殆庶幾矣乎。

〔校異〕

c 睽…集成本、「睽」に作る。 d 淳…集成本、「淳」に作る。 e 利…学案補遺、「理」に作る。 f 豈…学案補遺、「□」（欠字）に作る。 g 累…学案補遺、「類」に作る。 h 四…学案補遺、此の字無し。

〔注釈〕

(9) 一是之地…もと陸九淵のことば。淳熙 15 年 (1188) から翌 16 年にかけて、周敦頤『太極図説』をめぐる、いわゆる「無極太極」論争において、陸九淵が朱熹に宛てた書簡の中に見える。『象山全集』巻 2、「与朱元晦」2（『陸九淵集』、中華書局、1980 年 1 月 / 26 頁）に「吾人皆無常師、周旋於群言淆乱之中、俯仰參求、雖自謂其理已明、安知非私見蔽説、若雷同相從、一唱百和、莫知其非、此所甚可懼也。

何幸而有相疑不合、在同志之間、正宜各尽所懷、力相切磋、期歸于一是之地〔吾人皆な常師無く、群言淆乱の中に周旋し、俯仰参求し、自ら其の理 已に明らかかなりと謂うと雖も、安んぞ私見蔽説に非ざるを知らん。若し雷同相従、一唱百和すれば、其の非を知る莫く、此れ甚だ懼るべき所なり。何ぞ幸ひに相疑ひて合わざる有り、同志の間に在りて、正に宜しく各おの懷ふ所を尽し、力めて相切磋し、一是の地に帰さんことを期すべし〕とある。「一是之地」の語は、同時代の文献にはほとんど用例がないうえ、ここで陸九淵が雷同追従を警戒しつつ、見解の異なる者同士の間での切磋琢磨を勧めている点は、袁甫のそれと共通している。おそらく袁甫は、この陸九淵の書簡を踏まえて、「鄞県学乾淳四先生祠記」を執筆したといつてよいであろう。

- (10) 上天之載、無聲無臭…天のはたらきの測りがたいことをいう。『毛詩』大雅・文公に「上天之載、無聲無臭。儀刑文王、万邦作孚〔上天の載、無聲無臭。文王に儀刑して、万邦孚を作さん〕」とあり、また『中庸』に「詩曰……上天之載、無聲無臭、至矣〔詩に曰はく、上天の載、無聲無臭、と。至れるかな〕」とあるのを踏まえる。
- (11) 殆庶幾矣乎…『周易』繫辭下に「子曰、顔氏之子、其殆庶幾乎〔子曰はく、顔氏の子、其れ殆んど庶幾からんや〕」とあるのを踏まえる。顔氏（すなわち顔回）は、その徳行が高く評価され、孔子に最も囑望された、聖人に近い「亜聖」の一人であった。

〔通釈〕

四先生に二つの道はないのだが、学ぶ者たちが仰ぐ師は様々であり、そのため隔壁が設けられ、境界で分けられている。いわゆる自らに切実な実学、忠君孝親の真心、経国済世の実用が切り離されて、やり遂げられないのは、かえって漢代の儒者よりもひどく、悲しむべきである。乾道（1165～1173）、淳熙年間（1174～1189）以来、四先生は相継いで現れたが、その義利を明らかにし、正邪を分かち、わが道に貢献した方法は、果たしてどうであっただろうか。弟子はその師を尊ぶが、まずは必ずその師の道を知らなければならない。大本が必ず正しく、大旨も必ず明らかであれば、道はそこにあるのに、どうして些細な言辞や賛否などを手がかりに、長短を比較することにこせこせとし、かくしてことを成し遂げることができようか。行いは同類であっても心が違っていたり、名は同じであっても実が異なっていたりするの、後学の大きな弊害であり、どうしてそれを（行いや名は違っても、心や実は同じであった）四先生のせいにしえようか。四先生がともに切磋するにいたっては、もとよりかりそめに同調することはなかった。まさに道に到着はなく、学に停止はないのであって、いっそう弁論し、一致点（一是之地）に辿り着くよう求めていく。これが善に従い義に服する公心であって、とりわけ後学が軽々しく議論できるものではない。

いま趙（希聖）君は、四先生を県学に合祀した。それは各々が一家をたてることから抜きん出ており、大道の統（一）という点について、必ず得るところがあるはず

だ。「上天の載、無声無臭」であって、私めがさらに何をか言いえよう。我が同志に願うことは、自らの心を欺くことがないようにすることだ。そうすればほとんど（聖人に）近いであろう。」

### 3. むすび

以上、「鄞縣學乾淳四先生祠記」を精読することを通じて、袁甫のいわゆる「朱陸張呂折衷」論について考察してきた。そこでとりわけ注目すべきは、陸九淵の文集から「一是之地」という語が採られている（本稿 65 頁）ことである。

陸九淵はこの語を、いわゆる「無極太極」論争と称される、朱熹宛ての書簡の中で用いている。この一連の書簡において陸九淵は、周敦頤『太極図説』をめぐる解釈にはさほどの関心を見せず、むしろ「かたくなに自説を一方的にくりかえす朱熹の思惟方法」こそを批判したのだとされる<sup>(1)</sup>。「一是之地」という語もまた、このような文脈で解釈されるべきであろう。すなわち他人の意見を聞き入れない朱熹をたしなめるために、この語は用いられているのである。

しかし袁甫は、朱熹と陸九淵のみならず、張栻や呂祖謙までもがみな、「一是之地」を目指して、切磋琢磨していたのだと考え、独自の「朱陸張呂折衷」論を展開していった。そもそも陸九淵の朱熹批判の文脈で用いられていたはずの「一是之地」という語が、かえって「朱陸張呂折衷」論へと読み替えられていったことは、「朱陸」論から「朱陸折衷」論へとという南宋思想史の流れを検討する上で、注目すべき現象だといえるであろう。

[注]

(1) 吉田公平氏『陸象山と王陽明』（研文出版、1990年1月）、Ⅱ「陸象山」。また福谷彬氏『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会、2019年3月）における一連の議論を参照。

### Abstract

Yuan Fu 袁甫 in the Nan-Song 南宋 Dynasty is famous as a Zhu-Lu 朱陸 eclectic philosopher. This paper focused on his writing: *Yin Xianxue Qian-Chun Sixiansheng Ciji* 鄞縣學乾淳四先生祠記 which referred to Zhu-Lu-Zhang-Lü 朱陸張呂's thought, and investigated Yuan Fu's Zhu-Lu-Zhang-Lü eclectic philosophy.